

「いじめ」を題材とした国際理解教育の実践

－IT 機器の活用を通して－

Understanding International Education: Through lessons dealing with "bullying"

江戸谷 智章*

EDOYA Tomoaki

Abstract

The necessity for Understanding International Education is obvious. Yet, although many lessons which are rich in ideas, with regard to international education, are performed in many schools, it is my opinion that almost all of these are taught on condition that students first learn to understand the cultural development of our own country.

However, one of the goals on Understanding International Education is to learn new ways to overcome difficulties in amicable ways, with word dialogue, by making students see how studying international attitudes to various confrontations they may be faced with can help them to deal with these situations.

I think that students will be able to acquire some of international attitudes through their learning "bullying" in school not only in Japan but also in other foreign countries. To grapple with the problem of bullying is indeed to understand one another. School is a place where children learn to interact with each other.

In order to educate about, and therefore eradicate the role of the "bully" in different societies, we can first compare the situations of other societies with the situation in Japan. Second, by letting students listen to a foreigner who can relay his or her own experiences of "bullying" in their respective countries, they can gain knowledge from this person's perspective. The third is to allow students to express their opinions on this subject with Bulletin Board System and E-mail, and to review their feedback. It is dialogue, communication, that is best suited to help students to understand why "bullying" exists and what are the solutions to it.

I hope that these activities would serve as a helpful way for students to analyze their own attitudes towards "bullying", and to make them more aware of their place as a part of a wider society.

1 はじめに

国際化、情報化、少子・高齢化、価値観の多様化など社会が大きく変化している中で、異なる文化への理解、男女共同参画社会の実現、バリアフリー社会の実現など山積された課題や問題を解決するために、今まで以上に社会生活を営む様々な人々が、互いに認め合うことが求められている。また地球環境を視野に入れた時、人間同士だけではなくあらゆる生き物には命があるという意識をもつことの大切さも叫ばれている。

このような環境下において、1996年の中央教育審議会が『21世紀を展望した我が国の教育のあり

* 研究協力者

方』(第1次答申)において、「自己の確立」と共に異なる文化を持った人々と共に生きていく「共生」を中心とした国際理解教育を進めることを提唱したのは承知の通りである。社会環境が大きく変化している中であって、今こそ時代を超えて変わらぬ価値観を生徒達に伝えて行かねばならないと思う。小西正雄氏が、「異文化理解を未来志向で総合的なものにするには、子ども達に判断させることが必要であり、他者を理解するための異文化理解ではなく、自己を判断し、変革していくための選択肢を求める異文化理解を目指すべき」^(註1)と提唱するように、今後現実に関わりうる様々な対立を平和的に乗り越えさせ、更には生徒達が自分の生を愛し、他者を理解し共に成長していく人間関係で結ばれた社会の基盤づくりに積極的に関与できるように、国際理解教育を通してこれまで以上に人類共通課題の解決のために参画できる人間の育成を進めていくことが大事に思い私見をまとめるに至った。

2 研究の概要

今回「いじめ問題」を題材に国際理解教育に迫った理由の1つとして、生徒達にとって身近な共生が実現される場合は、まさに生活の中心となっている学校からであること。そして2つ目に、公立中学校でのいじめ発生件数が年間1万6千件を超える現状にあって^(註2)、生徒達にとって直接的な問題から出発することにより、希薄さを増しつつある心のつながりを再認識し、対人関係能力の補強が図れるのではないかと考えたこと。そして3つ目に、いじめという1つの現象から、現在までに生徒自身が体感したことを土台に、いじめ問題の解決(更には人権問題)という共通の基盤に立って、諸外国ではこのいじめをどのように考え、また解決に向けてどうアプローチしているのか、その共通性とその国独自の手法を知り、更には自分の考えを様々な機関に発信できるのではないかと考えた。

それぞれの国にはそれぞれの文化的差異があるが、そこに起きる「いじめ」には、ある種共通した特徴があるのではないかと考える。なぜならば、そこには文化の差こそあれ人間社会の基盤は、人間と人間の心の交流であり、まさに人間理解であるからではないかと考えるからである。

異文化理解・多文化共生が叫ばれている昨今、いかに異文化を理解しようとも、人としてどうあるべきかは、いつの時代も国を超えて普遍的なものではないか。またそういった共通の基盤に立ってこそ、共生社会が育まれていくものではなからと思う。これからの時代を生き、これからの時代をつくる生徒達と共に、様々な人々と積極的に関わりを持ち、人との関わりを通して課題解決の手だてを共に学び合いながら自分を真摯に見つめ、自己教育力をより高めて生きていける社会を切望し、「いじめ」を題材として取り組んだ。

(1) 研究仮説

- ①いじめという身近な題材から、生徒達がいじめの現状とその解決に向けて進んで考え、自己をしっかりと見つめ他者を理解し、共に成長し共感できる人間関係を構築し、自分の考えをしっかりと主張することができるであろう。
- ②IT 機器(特に電子掲示板・電子メール)を通して自分の意見や考えを交換し、様々な問題の本質を探り、自分の考えを再構築することにより、コミュニケーションの重要性を理解することができるであろう。
- ③諸外国(米国・英国・オーストラリア・カナダ)におけるいじめの現状とその解決に向けての取り組みを調べ発表したり、また直接外国籍(フィリピン)の方から人権に関する話を聞くこ

とにより、自分の体験や身近にあるいじめの現状から人権問題の深刻さを知り、問題解決に向けて積極的な姿勢を示すであろう。

(2) 対象学級

・学年 第2学年 20名 ・科目 選択英語（週1時間・年間15時間）

(3) 活動計画案（13時間）

	時	主な活動内容	備 考
事前	2	<ul style="list-style-type: none"> ○ガイダンス（学習方法の説明） <ul style="list-style-type: none"> ・単元の流れを理解する ○「由野台中いじめ撲滅対策委員会」設立 <ul style="list-style-type: none"> ・委員長、副委員長の決定 ・「いじめ」調査班づくり <p>主に英語圏の国々における「いじめ」の実態調査をグループで行うための班作りを行う</p> <p>アメリカ調査班 カナダ調査班 イギリス調査班 日本調査班 オーストラリア調査班 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ネット・ツールの使い方練習 <ul style="list-style-type: none"> ・電子掲示板書き込み練習（ネチケット） ・翻訳ツールの使い方練習 ・電子メールの使い方（ネチケット） ○構成的エンカウンターエクササイズ「私の町の商店街」を各調査班ごとに行い、自己開示を図りながら話し合いのルールを学ぶ ○7月にとった「いじめについてのアンケート」の集約をもとに、ディスカッションを行う 	<ul style="list-style-type: none"> ・国際理解をバックボーンに、身近な問題としての「いじめ」について考えそこから差別問題・基本的人権・国際理解へと視野を広げていく ・委員長は、後に解説する掲示板の管理を行わせる ・各調査班には1名の班長をおく <ul style="list-style-type: none"> ・Eメールアドレスは、本校のGメールを配布する ・プレゼンテーションの方法なども、パワーポイントで例を示しながらここで示唆する ・今後の話し合いを有意義なものとするためにグループの特徴や各人のこれからの役割等についてゲームを通して示唆 ・本校生徒のいじめについての考えを各人で分析させる
知る	6	<ul style="list-style-type: none"> ○「いじめの性質」「いじめに関わる役割」について班別で討議する <ul style="list-style-type: none"> ・いじめを黙認・促進・防止する原因やきっかけなどを様々な立場で考える ○いじめ掲示板を設立し、「いじめの定義」「解決法」について、それぞれ自分の考えを公開し、他者との考えの相違点等について参考にしながら定義付け、解決法を探る ○調査・研究 <ul style="list-style-type: none"> ・各国の「いじめ」について調査開始各グループに分かれて、レポートにまとめパワーポイント等を利用し発表出来るようにする ○発表 <ul style="list-style-type: none"> ・各グループで調査した内容をプレゼンテーションを交えて発表する（海外4カ国） 	<ul style="list-style-type: none"> ・加害者・被害者・傍観者の立場や子ども・親・社会の視点になっていじめの性質を考えさせる ・いじめの定義についておよそ3項目程度にまとめさせる ・自分の考えに意見があった場合は必ず返答させる ・授業時間のみでは厳しいので、昼休み等インターネットを開放 ・オーストラリアのいじめについてはALTの協力を得る <ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイント手引きを参照させる
為す	1	<ul style="list-style-type: none"> ○日本調査隊の発表 ○ディスカッション <ul style="list-style-type: none"> ・地域に住む外国籍の方に来校してもらい、いじめ・差別をもとに話をしてもらい、その問題性について考える 	<ul style="list-style-type: none"> ・知り得た情報等は、学級掲示をし、広くクラスに活動を啓蒙させる。 ・外国籍の方の参加についてはALTも視野に入れる
共に生きる	2	<ul style="list-style-type: none"> ○情報発信 <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えをEメール等で発信する ・掲示板を通して、「いじめ撲滅に向けて」自分の考えを更に補強する 	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめ、差別の悲惨さやその問題性を自分なりの意見にまとめ今後自分がいじめにどう取り組むのか、また様々な人権問題解決に向けてをネットを通じて諸機関に発信させる

人として生きる	2	<ul style="list-style-type: none"> ○「由中国連憲章」作成 <ul style="list-style-type: none"> ・まず校内に広報し、以降の活動については継続活動できるような取り組みをめざすように促す ○全体を振り返り、感想を述べる ・授業を振り返っての感想を、自分が発信したメールをもとに全体で発表する 	<ul style="list-style-type: none"> ・各クラスに「由中国連憲章」を掲示し、短学活等を利用して、意識化を図らせる。可能であれば、生徒会の代表議会等を利用し、全校に流布できるよう促す。
---------	---	--	--

指導計画の項立ては、ユネスコ「21世紀教育国際委員会」の報告書「学習：秘められた宝」(Learning: The Treasure Within)における「学習の四本柱」にある「知ることを学ぶ (Learning to know)」「為すことを学ぶ (Learning to do)」「共に生きることを学ぶ (Learning to live together, Learning to live with others)」「人間として生きることを学ぶ (Learning to be)」を参考とした。(註3)

3 IT の活用

(1) 電子掲示板の活用

今回生徒の話し合い活動を活性化させるための一助として、電子掲示板を利用することとした。



いじめ撲滅委員会 HP

1対1の対話にあるが、生徒達の自己開示力の弱さ、自己表現力の不十分さを考えると電子掲示板を利用することで、ある程度その弱点をカバーできるのではないかと考えた。

今回は「いじめ」を主題としているため、集積される意見内容も極めてデリケートな内容であり、特にいじめ被害生徒への配慮のない意見も掲載される可能性があることから、掲載にあたっては記入者が直接掲示板にアップできないよう、一旦管理者側で文章内容をチェックし、公開に差し障りのないものを掲

示板にアップできるようなシステムを利用し、掲載内容を制限することにした。

電子掲示板を用いる主な利点としては次のようなことが考えられる。

- ①掲載者を匿名とすることで、臆することなく自分の考えをしっかりと表明できる。
- ②掲載内容の履歴を見ることで、自分や参加者の考えの傾向や移り変わりを知ることができる。
- ③電子掲示板に掲載されている文字情報を確認し、即答を強いられずに生徒自身が自分の意見をゆっくり練り上げられる。

(2) 翻訳ツールの活用

今回の実践授業で利用する主な翻訳ツールとして、ウェブ翻訳サービスとテキスト翻訳サービスの2つを生徒に紹介した。中学2年生の段階において、自分の考えを海外に発信したり、海外の情報を得るとなるとどうしても外国語が壁になる。ネット上の翻訳ツールは決して完全なものではないが、英語を苦手とする生徒には、強い味方となったと考える。

（３）調査・プレゼンテーション

プレゼンテーションについては、操作方法等に十分な時間を確保できなかったために、「一太郎」（ジャストシステム社）に調査報告をまとめさせ、スライド機能を使ってプレゼン発表を行わせた。

発表は、日本を含む５カ国（米国・英国・カナダ・オーストラリア）を４～５人の生徒で分担し、各国の教育システムやいじめ対策・被害の状況などを中心に、自分達を知るいじめとの共通点や相違点また特別な対応策などをレポートさせた。タイピングに多少の個人差はあるものの、グループで班長を中心によく分担され、罰や制裁を与える法的アプローチ、カウンセリングや話し合いで生徒の関係を改善させる人道的アプローチなどの発表に強く興味を示したようで、生徒間で様々な質疑も交わされた。



調査発表の様子

（４）電子メールの利用

個人で電子メール用のアドレスを持たない生徒には、学校管理下にあるＧメールを配布し活動を支援した。主なメールの宛先については、文部科学省、教育委員会、首相官邸、ブッシュ大統領、国連アナン事務総長、外務省、新聞社などがあつた。

（５）ネチケットについて

情報モラルの重要性を生徒に伝えるために、相模原市教育委員会で作成された『マイ IT ブック』（ネットワーク社会の危険性と情報モラル p27～28）を活用した。

４ 生徒の活動から

（１）知る活動 掲示板を利用した「いじめの定義」の考察

掲示板に掲載された「いじめの定義」から、その後話し合いで生徒達が定義づけた「いじめ」

- | | |
|--------------|---------------------|
| ア 複数で行われ | ウ 一方的に |
| イ ある程度の期間をもち | エ 相手に精神的、肉体的に苦痛を与える |

この結論に達するまでに、管理者側でプライバシーの問題から削除した掲示内容を含めて38の考えが寄せられた。（最終的にアップされたものは28）生徒達も自分の意見を内省・修正していく過程が見られる。ある生徒の掲載文を追ってみたい。

＜Ａの書き込みから＞

- A 1 「（前略）何でいじめているっていう自覚があるのに、何でいじめているんだろう（後略）」
- A 2 「（前略）私も今、クラスでいじめる側に立っています。何でいじめているんだろうって、時々自分に問いかけています。（後略）」
- A 3 「（前略）自分もやらなかったら、自分がいじめに遭う。そう思っていじめがどんどん大きくなると思う。（後略）」
- A 4 「（前略）いじめって団体でやることが多いと思うけど、それってある意味弱いものいじめだし、いじめている側のストレス発散方法だと思う。（後略）」

A5「(前略)」そういう先生がいなくなっているというのも現状。先生の言葉を素直に受け止められない生徒がいるのも現状。まず先生のことばかり攻めずに、自分はどうかと振り返るのも大切だと思います。(後略)」

A1時点では身近に起きているいじめに対して傍観者的なスタンスであったが、A2時点では実は自分自身が、傍観者というよりは加害者側に身を置いていることを告白している。更にA3では自分が加害者側に身を置いている事への理由を述べ、A4ではそういった自分たちのいじめに駆り立てる言動が、実は無意味でストレスの発散でしかないことにまで言及している。A5の時点では、いじめが根絶しない理由を教師を含む大人社会に問題があるとするやりとりの中から、実はそうではなく自分自身がどうあるべきなのか自分の行動を振り返るべきであると反論している。この生徒がその後、クラスの中で現存するいじめにどう取り組んだのかまでは追跡できていないが、少なくともA1時点での第三者的な立場から脱却し、それまでの自分を見つめ直すことで変わらねばならない自分に気づき、他者理解に前向きな姿勢を示すまでとなったことは評価したい。

なぜいじめが起こるの？

投稿日 10月21日(火)12時18分 投稿者 GIRLS★ [gfw1.sagamihara-knged.jp] □ 削除

何も言わずに見ているだけの人もいじめだと言う人がいましたが、気付いているのに止める事が出来ないのも現実です。いじめが完全に正しいなんていじめてる人だとは思わないでしょう。でも、それでもいじめてしまうのは、柴亜さんが言ったようにその人が自分の感情を暴力や陰口でしか表現できないからだだと思います。少しでも我慢する事が出来ればいじめなど起こらないと思います。

うまく伝える事は出来ませんが私なりにいろいろ考えた結果です。皆さんの意見も聞かせて下さい。

いじめについて私はこう思います。

投稿日 10月21日(火)12時16分 投稿者 亜土ちゃん [gfw1.sagamihara-knged.jp] □ 削除

「いじめ」それは、一人の人に対して複数の人達で、いやがらせや無視、言葉の暴力など色々あると思う。私はその中でも一番、傷ついてしまうのは「言葉」の暴力だと思う。なぜ、「いじめ」が起きるのか……？

生徒が掲示板に書き込んだ「いじめの定義」の一部

また、「いじめの定義」を考えさせた過程の中で、上記の生徒同様に当初生徒の多くが「いじめ」そのものをあてはならないと根拠なく否定していたが、意見を交換していく中でいじめを止める勇気や行動を起こせていない自分と向き合い、もしかしたら自分もいじめに荷担しているのではないかと自問自答し内省していく様子が見られた。また現状のいじめ社会を作り上げてきた教師を含む大人社会を非難しながらも非難だけで終わってはいけなく更に次のステップへと言及する生徒も見られた。この生徒達が、「正義とは何か」について掲示板で意見を交わしている部分を取り上げてみたい。

●「(前略) いじめは子ども同士だけの問題ではないと思います。よく最近のニュースで、いじめられ自殺した中学生の話などがあげられます。そんな時よくその学校の先生達が「この学校には、いじめはなかった。もっと早く気づいてあげれば……」などと言っています。こんな時、「先生は何でいるの?」と思ってしまいます。(後略)」

- 「(前略) 何で大人はみんな臆病なの……？世の中にいじめがいっぱい起きているのに、何で何にもしてくれないの？どれだけ苦しんでいるか…… (後略)」

上記2名の投稿は、いじめがなくなる原因に新聞やニュースで報道されるように、教師を含む大人社会の怠慢さを強く訴えている。このような大人社会への不満が多く寄せられていた中、次のような書き込みが少しずつ増えてきた。

- 「(前略) いろいろ読んでみると、自分たちの問題を、結局大人のせいにしているとしか思えません。もちろん腐った大人はたくさんいると思います。でもそのことの原因や責任を自分の外にあずけるのは、なんか卑怯だと思うのです (後略)」

- 「(前略) ここで大人の批判をしている人たちは、批判できるくらいに正義があるの？昔は私も子どもが純粹で、大人が汚いと思ってた……。でも子どもも自分のことばかり考えて、平気で嘘つくやついるし、いざとなったら身って見ぬふりしたり、自分が傷ついても悪と戦っている人は、信じられるけど、自分からルールを乱して、さも当たり前な顔をしている人が正義を主張しても意味ないよ (後略)」



掲示板に意見を書き込んでいる様子

大人社会への批判の目を持ちつつ、果たしていじめ

がなくなる原因は全て大人にあるのか。目の前に起きているいじめに対して、生徒である子どもには責任はないのかを自問しながらも警告しているように感じられる。この様なやりとりが2週間ほど続く中、大人社会への批判を強く持っていたグループから少しずつ変化が見られた。

- ☆「(前略) いじめの原因を作り出した私たちが一番悪いのはわかっています。先生、親はその後です。先生に相談して先生がいじめを解決できなかったらそれは先生の責任というのは確かに間違っていると思いますが、先生も勉強を教えているためだけにいるのではないと思います (後略)」

- ☆「(前略) この頃みんな大人のこと、自分のことを棚に上げて書いていませんか？全てが全てホントに親が関係していないとは言えないかもしれないけれど、みんなが言っているくらい親ってそんなに悪いですか？親がいじめろって言っているわけじゃない、自分たちが気に入らない相手に対して、嫌なことをしたり、いたずらをしたり…… (後略)」

本来であれば、自分の意見は直接自分の口で伝えた方が良いのかも知れない。しかし中学生ともなると様々な人間関係が背後にあり、特に自分の意見に異を唱える集団に対して正面から論議を起こすにはやはり勇気があるようである。掲示板への投稿であれ学級討議であれ、共に学び合おうとする気構えが生徒個々になくは切磋琢磨はあり得ない。批判するにしてもまず相手の考えをしっかりと聞く姿勢が大事であること。そしてこのような問題を解決するには、一人でも多くの人の力が結集しなくては成し得ないことを毎時間の授業の中で生徒達に強調した。

(2) 為す活動 地域在住の外国籍の方とのディスカッション

フィリピン国籍の地域支援者に来校していただき、フィリピンでの学校の様子や親子関係、日本のいじめについてディスカッションを行った。すでにここに至るまでに、日本をはじめ英語圏の4つの国のいじめの状況や地域をあげてのいじめの対策を調査・報告をした後だったので、たくさんの質問がなされ、自分なりの考えを直接投げかける機会となった。また支援者の方からも人種差別

を含む人権問題を提議していただき、いじめ問題が単に学校の教室で起きる狭い範囲の問題ではなく、人種という枠にまで及んでいる事実を感じ取っていたようである。このディスカッションを終えての生徒感想のいくつかを紹介したい。

○フィリピンの話を聞くと、すごく日本のいじめは幼稚なものだと感じた。日本はみんなとまとまって弱い人をいじめているけれど、やっぱり1人に対して1人で立ち向かう勇気が日本にはないんだと思った。(中略) 偏見やいじめは、個人差などを考えられるような人間にみんながなれたらなくなると思います。

○とにかく〇〇さん(支援者名)は強いなと思った。フィリピンの人は、いじめについて深く考えていて自分で解決しようとする気持ちを持っている。日本のように耐えきれなくなったから「自殺」を考えるのではなく、それだけ命に誇りをもっていて、本当に日本のいじめについて考えさせられた。(後略)

○人は何か通じ合えるものをもつことでいじめはなくなるんだと思います。そして自分にしかないものを探してそれを持ち続けることで、逆に自分について知ってもらえるということを学びました。

○フィリピン人に対して私たち日本人がいじめを行っているのには、悲しくなっていました。人はそれぞれ1人ずつ違っていて、同じ人なんていない事を忘れないようにしたいです。



(3) 共に生きる活動 生徒が発信した電子メール

授業の終盤において、生徒達がいじめ・人権問題等で学んだことから自分の考えをまとめ、電子メールを利用して発信した。外務省を含む諸外国へ宛てたメールがいくつか出されたが、その背景に授業研究当初、米国によるイラクへの武力介入が大きく報道されており、いじめ学習の中から彼らが感じた弱者への一方的な圧力への憤りを彼らなりにこの問題と重ね合わせ表現されたものと考ええる。主な発信先は、3(4)を参照。

○国連に宛てた生徒のメール (英文省略)

「私は中学2年生です。私は「世界のいじめ」について調べて思ったことを書きました。あなたが最後まで読んで下さると幸いです。

いじめは子どもたちや大人(会社など)だけの間で起こることをよくいいますが、私はあまりそうとは思いません。幼児虐待、精神・身体的障害者に対する軽蔑、国際的な人種差別もいじめととらえるべきだと思います。そしていじめの加害者、被害者だけの問題ではありません。見ているだけの人、周りの人も関わるべきだと思います。この問題は現在、各国での調査があまり行われていません。それよりかは「校内安全」の方に力が注がれているのが現実なのでもっと「いじめ」という事を調査するべきです。

また今現在、一部の国では内乱、戦争が起きています。それを国という枠にただ、偶然にそこにいるだけで本当に他人とを考えてしまっているのでしょうか。しかし人間というのは感情をもっています。だから容姿や性格その他ちょっとしたことでも「好き」はもちろん「嫌い」という感情を抱いてしまうのです。だから「いじめを100%なくそう」といってもそれは不可能なことなのです。

しかし市が、国が、世界が動けば少しでもいじめを減らすことができるのではないのでしょうか。そうでなければいつまでもいじめというのは解決していきません。ただ議論すればいいだけではありません。ただ「いじめは悪いことだ」と言うだけではどうしようもありません。ただメディアが現状を伝えてもどうしようもありません。各国の協力が世界のいじめを減らすことにつながっていくと思います。」

○国連に宛てた生徒のメール（和文省略）

「How do you do? I am a junior high school student in Japan. I am investigating about bullying in countries around the world. And the country that I had the most interest in is Australia. Because there are lots of people from all over the world lives in Australia, I thought that there are no Racial discriminations. But when I researched about it, I found out that there are lots of bullying and Racial discriminations in schools and in the society.

I think that discriminations and bullying are problem for children and adults. Therefore bullying relates to everyone. There are campaigns to stop bullying but most of the people that participates in it are children. If there are bullying in the adult`s society, why don`t they participate in it? I think that adults see bullying as a very small problem. The first thing that you will think of by the word bullying is small arguments that are happening in schools. But what happens if you replace the word bullying to discrimination? Then, it will no longer be children`s problems.

It is strange that the people that would relate changes even though it is the same meaning. If you don`t think of bullying, then it means that you have no interest in discrimination. So I think adults should have more concerns about bullying.」

○米国ホワイトハウスに宛てた生徒のメール（英文省略）

「初めまして。私は日本の中学生です。今、私はいじめについて授業を受けています。

私はいじめ撲滅は大変難しいと思います。でも、いじめとは子供だけの問題でしょうか？『いじめ』とは仲間はずれや、無視、暴力などがあげられると思います。しかし、国同士の戦争、国内の紛争・内乱もいじめの一種ではないでしょうか？戦争で負けた国を勝った国は奴隷のように扱い、自分たちは良い思いばかりする、まさに、子供達が学校でクラスメイトに行っていることと同じではないでしょうか？

また、各国のいじめについて今まで調べてきました。オーストラリア・アメリカは、いろいろな人種の人があります。その中で未だに人種差別などの偏見があったり、自分と違う考えの人をいじめの対象にしたり、日本と似ている部分もあればその国の環境によって違ったりと、何処の国でも、いじめは発生しています。私は何故戦争が起こるのか、たまに疑問に思うことがあります。しっかり話し合いをしたけれど、最終手段として戦争をする。最終手段として戦争をするのはなぜですか？戦争はさまざまな人を不幸に陥れます。各国の国民に選ばれた人々が選んでくれた人々を率先して不幸にしてなにが残るのでしょうか？それは国同士の勝敗で決まるとは思いますが、戦争をして、喜ぶ人はいないはず。このように、大人の人々もいじめを行っているのです。いじめは子供達だけの問題ではないことを大人の人達にも理解して頂きたいと思っています。」

5 授業を終えて

いじめ問題という身近な題材から、その解決に向けて単に善悪といったステレオタイプの結論に終始せず、仲間や外国籍の方との対話を通して今までの自分の言動を振り返り、それまでの自分にはなかった新たな視点でいじめを捉え、いじめ解決に向けて自分なりの考えを主張することができたという点ではいじめという題材は意味あるものとなった。

また IT 機器の利用では、諸外国のいじめの現状をインターネットを利用して調査させたが、いじめという身近な題材だけに、他国での状況に生徒達は予想以上に関心を強く示していた。海外の情報を得るために海外のサイトを閲覧するとなると、どうしても外国語が次のステップへの壁となり十分な調査ができずに終わってしまうことがありがちだったが、翻訳ツールの活用により授業への意欲も高められた。また翻訳ツールといえども不十分な和訳や英訳を目にしたことで、最後は自分自身の言語能力が重要なんだと再認識した生徒も多くいたようである。また意見交換を電子掲示板を用いたことでは、自分の発した1つの問題提起から様々な角度からの意見が寄せられることで、日常の授業では自分の意見を主張することすら苦手とする生徒も、ネット上では反論し自分の意見を確固なものへとしていく過程なども見られ、コミュニケーション活動としてはそれなりの効果が得られたものと考えている。

国際理解を視野に入れ積極的に問題解決を図るといった視点では、外国籍の方と直接話し合いをもったことで、それまで知らされることのなかった日本人のイメージなどが知らされ、一応に自分自身の言動を振り返るきっかけを得て、日本をはじめ深刻さを増す他国のいじめの状況やその対応策を自ら調べ、諸機関に人権問題の深刻さやいじめ解決に向けて自分の考えをメールで訴えたり掲示板に投稿するまでは行動化を図ることができた。しかし残念なことに、全13時間で臨んだ指導計画の中で、電子掲示板書き込みのためのネチケットに多くの時間を割いてしまい、当初「人として生きる」活動場面で「由中国連憲章」を提示し、短学活等を利用するなどしていじめ撲滅に向けて各学級・学年に運動を呼びかけ、また実際に生徒達の身近に起きているいじめに向けて具体的、直接的な解決策を検討させる予定だったが、より積極的、継続的な取り組みまでは発展できず、この授業に直接参加できなかった生徒達に還元できなかったのが残念だった。

6 今後の課題

この授業を設定するにあたって、2年生の選択教科（年間15時間）を当てたが、言うまでもなくこの時間で国際理解教育が完結するものではない。中学校では国際理解教育に限らず、人権教育・環境教育・平和教育等、社会的課題を扱った分野の学習効果を上げるには、一教科では年間時数や指導計画から難しく、どうしても学年・学校をあげてのクロスカリキュラム的な取り組みが肝要と考える。しかしながら各教科に学習内容の共通性があっても、教科年間計画や教育課程の変更を含めた教師側にダイナミックな発想がなくてはやはり効果は望めない。現状では教科担任個人の裁量に任されているところが多分にあるが、生徒の活動を単なるワン・ショットで終わらせないためにも可能なかぎり教科・道徳・特別活動との横断的な学習形態を研究していく必要がある。

また国際理解教育の評価においては、中教審答申にある国際化に記されているように、理解の深まりや技能習得に限らず、態度や方向性、価値観を重視することが大事であると考えている。言うまでもなく国際理解教育そのものの目標をどこに置くかでその意味合いは変わってくるが、どのような

資質・能力を育成しようとするのか、国際理解教育の総合的性格をすれば様々なアプローチがあって当然である。授業者ばかりでなく各々の生徒が自分で目標を定め、どのように変容・成長し態度や実践に移せたか、自己の反省やこれからの方向性に目を向けるような評価がこれから必要と考える。

（引用文献・参考文献）

- 註1 小西正雄著「相対主義を超えて」『国際理解25号』72-83頁（帝塚山学院大学国際理解研究所、1994年3月）
- 註2 「文部科学省報道発表一覧」平成13年度の生徒指導上の諸問題の現状について（速報）
2002年8月23日 <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/>
- 註3 天城勲訳『学習：秘められた宝ーユネスコ「21世紀教育国際委員会」報告書』66-76頁
1997年 株式会社ぎょうせい